

2000年 二月

オレはまだ中学生だった。青春まったただ中、なんて考える暇も感慨にふける感傷的な趣味も持ち合わせてはいなかった。

でも、今思えば、青春カムバック！ ただし青春スーツはいりません、みたいな感じだろう。あの恥ずかしくてバカみたいにかっこつけようとしてた野郎が、まさか自分だとは再認識させられたくないんだよ、マジでさ。

自己申告するほどでもないんだけど思春期の男子中学生ってさ、頭の中で女子にモテたいっていう思考に支配されう時期が、短周期で訪れるもんなのさ。それを大っぴらに表に出す奴もいれば、奥手で「僕はそんなこと興味ありません」みたいな面してる奴がいるんだけどね。オレは後者だった。後者の場合、オレの独断と偏見と悪意に満ちた統計では、八割方、愛の伝道師もサジを投げるか石を投げるタイプなんだよね。ちなみにオレは、素晴らしきかな、その八割に含まれた人種だったのだ。

自他共に、冴えない、もしくはダサイ、あるいはその複合型の人間だったとパブロフの犬より素直に頷き認めている。そんな事分っているのさ、トムソンくん。：誰だ、あんた。

だがしかし、そんなオレにも、彼女が出来た。

しかも告白されるという、きっと雲上の雷様と肩を並べるぐらい奇跡的かつ阿鼻叫喚な位置に立ったのだ。阿鼻叫喚とは、その時のオレの心象風景がそんな具合だった。

だが、オレはあえて、その地獄と向き合い、思い返す。

唐突だった。前兆があったとすれば、その日の朝、二十三回目の寝坊で遅刻したぐらいだろう。

放課後。オレは、同じクラスの女子に呼び出された。……と言うほど大げさではなく、教室の外にちよつと呼ばれて、伝言を早口で押し付けられた。

「今夜八時。ペンギン公園でまってるから来てください。……って、萌絵が伝えてって。確かに伝えたわよ」

まるで決闘の申し込みをするかの如く威嚇的な口調で言うだけ言って、こっちの返事も聞かず、その女子は教室の中へ戻って言った。

周囲の雑音がその時、鋭い耳鳴りでカットされた。

恐ろしほどのタイムラグ経て、ワープ航法を繰り返して光の速度に迫って恐ろしい質量になってしまったぐらいの衝撃を受けた。

たった二言だ。「待っています」と「萌絵」という動詞と名詞が、稲妻に打たれ

もしも神様が 僕から全てを奪おうとしても
あなただけは 抱きしめて 離れたくはない
失うことが ああ 僕が消えてしまうより恐ろしい

好きです。

あなたを愛する誰よりも
あなたが愛する誰よりも
僕は、あなたが好きです。

終わってしまう恋に
結ばれなかった恋に
離れてしまった愛に
意味はあるのかな？
君の声を聴かせて、
僕はもう見つけたよ
意味は 君の中にある

スカイ・クロウ『ハチミツ雲』より。

た経験がないオレに、水素爆発級の衝撃を与えたんだ。

新車のテロか、それとも三村の悪戯かと思ったが、教室に残っていた彼女が、オレの方を見て、目線があうと、綺麗なコサインカーブを描くように目をそらした。それでこれが、罰ゲームから派生した悪戯ではないと確信できなかったが、妄想基本値が二乗ほど跳ね上がった、甘い、アリガたかりそうなほど甘い期待がオレを支配した。

『前園間 萌絵』

呼吸が止まった。頭痛がするまで忘れた。

その名前から鮮烈な光が発生したように、頭の中が真っ白になって、だけど、真っ白の世界で、彼女の顔が何よりも鮮明に浮かんできた。思い出させた。それが唯一の救いのように見えた。だってオレは、彼女を見ていたんだから。

深呼吸。

ホコリっぽい空気が、なぜか爽やかに冴えた空気に変化。

狂喜乱舞なんて高等ダンスを、今なら出来そうな気分。

242色のつまらない世界が、狂ったように弾けて、彩り増す。

火花だ。火花だ。バツクファイヤーだっ。

火事だ！ 地震だ！ 雷だ！ かき氷だ！

「うそだろ、…………マジかよ」

そう、嘘ではなかった。

間違いなく、彼女から誘いだった。

だから、オレは明日の説教覚悟で、部活をサポート、家に直帰した。

2

2015年 秋

「優しい夜風を受けてー 西へ向かう キミにもとへー とびぎりの尻をしかけて唇に毒を塗って待って欲しいー 叫びと喘ぎの渦巻く夜を 一緒に飛ばう〜」

四畳半のアパートの一室に響く、オレの美声。

「江崎さん。それ、何の歌っすか？」

まったく興味ありませんみたいな態度で、幸田が言うものだから、一気に白けてしまった。

「スカイ・クロウだよ」

「ああ、はいはい。…………初耳です。洋楽のラップには疎いんで、私」

「ジャバニーズ・ロックだ！」

疑似マイクのちくわを食べながら、オレは幸田の正面に座った。

幸田は、ちくわをくわえながら千円札を数えている。今、八回目の集計を終えて、溜息をついた。

「あー、今月あと四千三百九十一円で過ごさなきゃ。…………で、江崎さん。なんで私の部屋にいるんすか？」

ずれた眼鏡をそのままに、幸田がこれまた興味なさそうな眼差しを受けて尋ねた。

「おまえ、オレの話は一切聞かず、ずっと金数えてただろ。…………この金の亡者め」

「そんな事ないっすよ。ええ、ちゃんと聞いてました。江崎さんは一時間前、合コンから帰って来て、しかも女性をつれて。そして、上半身裸になっていた江崎さんは、その女性に「まだダ・メ」とか声優科出身のような声で囁かれて、おすおすと目的達成できず、だが、今度デートをする約束を勝ち取り、上機嫌で「やっぱ女は力だな」とかバカみたいな事を呟きながら、隣人である私の部屋に、なぜかちくわを持参して訪れ、これまたなぜか、中学生時代の思い出話を語りだし、昔のロックバンドの曲を熱唱、しかも音痴を自覚していないほどの夢中に歌ったのでした。

…………どうです、ちゃんと聴いてたでしょ？」

瞬きも、表情の変化も抑えた腹式呼吸による説明。幸田という人間は、こういう無愛想という武器で、人を攻撃するのが好きなのだ。

オレは、四ラウンド戦ったボクサーのような表情をしているだろう。

そんなオレに、慈悲という概念を持たない幸田は言った。

「江崎さん。いいかげん「女は力才だ、かわいい仕草だ」なんて、中学生みたいな理由で女選んでると、いつか遺体になりますよー。それに、合コンで出会っていきなり男の部屋に行くような女なんて、きつと他の男の部屋にも行ってますよ。ああ、絶対」

幸田は鼻で笑って、タバコを取り出して火をつけた。

「女を分っちゃいませぬね、江崎さんは。見た目に騙されるようじゃ、まだお子様です」

タバコをくわえたまま紫煙を吐いて、鼻で笑う幸田。不遜な態度。

相手を、つまりはオレを完璧に見下している眼差し。それでも敬語を使っている所が、癪に障る。

「それは仕方がない。思春期に埋め込まれた、いわば、魂の指向性なのだ」

幸田のサディスティックな暴言には決して負けない、オレのプライド。それは守らなければいけない人間性。そうさ、プライドは人間としての尊厳と同じなのだ。

だから決して、手放さない。否定しない。

やっぱり女は力才です。力才がよければ、他は些細な事。

例えば、目の前にいる隣人の幸田幸南。性別は女。だがしかし、いくらプライベートルースペースだからといって、ノーマイクで、ジャージ上下、タオルを頭に巻いて

赤剥眼鏡をかけて、タバコをくわえながら、千円札を数える冷酷な野郎、いや、女郎なんて、顔がかわいくでもなきや、彼氏はきつと一万光年先にしかい居ないだろう。

やっぱり女はかわいい方が良い。顔も性格も。

「それで、ええと何でしたっけ？ 確かその『前園間萌絵さんに呼び出された』って辺りでしたよね。……なんだか古典のラブストーリーみたいですね。よくそんなんで漫画家やっていけますね」

「あのな、古典だろうとなんだだろうと、これは実話なの、ノンフィクション。そしてオレが書いているのはフィクション。虚構と現実をちゃんと分別できない子供か？」

「私はオトナです。二十四才の女子大生ですよ。それに、それを言うなら江崎さんこそ、連載童貞の漫画家じゃないですか。しかも少女マンガ。……おまけに、ペンネーム使わず『江崎マユ』って男か女か分らない本名を通して、性別ごまかそうとしてますよね。自覚しているんですね、三十過ぎた独身男性が、女子中高生が読者のラブストーリーマンガを描くのが、後ろめたいって。……あ、これは良い事か。江崎さんもオトナですねー」

「あからさまに見下した笑みで褒めんなっ」

「それで、さっきの続きはどうなったんですか？ 付合ったんですよね、その前園間萌絵さんと」

短くなったタバコを空き缶の中に捨てて、二本目のタバコに火をつける幸田。胡座を組んで、短い周期で左右に揺れながらオレを見る眼差しは、さっきより多少は話を聴こうという光を放っているような気がした。

「それで今、その彼女とは……、っは、ごめんなさい。どこからどう見ても江崎さん、今、合コン行って一夜限りの彼女を捜してるほど、どフリーでしたね」

両手を顔の前で拍手より長い周期で重ねて離す幸田。まったく謝罪をするつもりはないと、オレは見た。

「ま、オレがどうしようが、あっちはもう結婚してるんだ」

「え！ そうなんですか？」

「子供も二人おりますねん」

「ああ……良かったですね、こんな売れない少女漫画家と一緒にならなくて……」

「心の底から余計なお世話だ」

「でも、江崎さん」

幸田が、ほんのり赤い唇からタバコを離して、軽く顔を傾けた。上目遣いで、綺麗な二重まぶたの瞳で、オレを見る。

「ずっと、好きだったんですよね、その人のこと。なのに、……どうして別れちゃったんですか？」

少し高い、幼い声で幸田が訊いた。

オレは幸田の力才を見た。

目の前の幸田と、中学生のオレの目の前に居た前園間との相似点なんて、目がつあって、鼻と上唇の間隔と、声の音域ぐらい見つけられない。それは、二人に限った事ではない。人類に、大抵は当てはまる。

だから、彼女は人間。

でも、天使を知らないその時のオレには、

前園間萌絵は、なによりも可憐な女の子だったんだ。

それは、きつと、今も変わることはないだろう。

3

2000年 二月

時間の経過に比例して緊張は高まる。何度も部屋の中をつぐるぐると見えない尻尾を追いかける様に回ったり、ベッドに寝転がって、受け身に練習をしていたり……。落ち着けなかった。

さすがにこのままだと、約束の時間一時間前には急性胃腸炎で入院しかねないと感じて、ベッドに仰向けになって、買ったばかりのMDプレーヤーで、音楽を聴いて気持ちを落ち着かせようと思った。

イヤホンを両耳につけて、瞑想をするように瞼を瞑る。

スカイ・クロウのアルバムが入ったMDをセット。

激しく、透き通る鋭さの音と、暗く少し淫らな優しい歌詞。

あまりメジャではないバンド。同じクラスでこのバンドを知っている奴なんていなくて、少しかっこつけて聴き始めたのに、いつからか、本当に好きになってしまった。

オレの頭の中では彼女の姿が映し出され、ヴォーカルの声がBGMになる。

彼女ことは、ずっとまえから知っていた。

小学校の頃、五年生の時に一度クラスが同じになった。

無駄の無いシンメトリーな造形で、静謐な顔立ちをしていた。だけど、明るくてかわいらしい仕事と笑顔が、思い出す彼女の表情の全てだった。彼女はクラスで一番の秀才だった。だから中学は国立大の付属へ進学するという話を、彼女の友達から聞いて、オレは一年間勉強した。理由は単純明快。彼女と同じ学校に入るため。

だがオチとして、彼女はそのまま地元公立中学校に入学。もともと、付属中学校の試験すら受けなかったという話を、オレが付属中学の合格通知を貰った日の夜に知った。だから、これまた単純というか潔いというか、オレもそのまま地元の公立中学校に入学した。当然のごとく、両親や当時の担任、しまいには親戚連中から

非難と説教を半年近く浴びることになった。
同じ中学校に入学して、二年生の時に同じクラスになったものの、これといって進展はない。

ダイレクトにアピールすることなんて出来なかった。
せいぜい彼女の近くで、バカみたいに大声だしてハシャいでみたり、ちよっと目立つ地位の学級委員になってみたり、テストで五教科全て満点をとってみたり、体育祭で派手に笑い(事故)をとってみたりするぐらい。

好き、と言ったのが恥ずかしかった。

そう悟られるのが、格好悪いと思っていた。

そんなウジウジしたオレが、自分でも嫌になってしまっ

もう彼女のことは諦めて、留学でもしようかと考えていた。

そんな中二の終わりの冬、オレにチャンスとカムイ神話の到来。

もう嬉しくて、死にそう。

『死ぬ事が怖くて、もう空を飛べなくなった

キミへの想いが積もり過ぎたオレは

もう二度と空へ昇る事ができなくなってしまった。

それでも、キミの手を握れない死が

なによりも 恐ろしいから

オレは あの前く錆びた空に別れを告げた』

飛行機乗りのラフソングで、アルバムは終わった。

涙を溜め込んだ眼が、ゆっくりと開く。

そして、枕元の時計を見た。

八時まであと二十分ぐらい。ここからペンギン公園まで歩いて十分ぐらい。今から出れば、少し早いけど、安全側だと思って家を出た。

そして、自転車に乗って猛スピードで猛進。

当然のように、約束の時間より早く着いた。

ペンギン公園のシンボル。ペンギン(らしき)の形をした滑り台とジャングルジム、なのに公園の隅っこに放置され、ペンキがずいぶんとはがれて、恐ろしい形相となっている。そんな不気味なオブジェの前で、寒さに震えながら、オレは立ち尽くしていた。だが、さすがに寒くなってベンチに移動して、表面積を減らそうと体育座りをして、ジャケットの中に忍ばせていたMDプレーヤーのイヤホンを耳に当てた。ぼんやりと、冬の夜空を眺めながらスカイ・クロウの『曇る雪とトカゲ』を聴く。

『暗い所で待っていた あなた あなたに出逢うため』

乾燥した空気が、唇から潤いを奪って、夜空をより美しく広げる。

天体に願うことはない。ただ、身体を震わせながら、たった一人を待つのも悪い気分じゃなかった。それは、とても新鮮な刺激でジワリジワリとプレスされる気分。

『イキ過ぎた情熱が 涙になってしまいう前に 僕の 僕の頬に雪を降らせてくれ』
雪の到来は期待できないほど綺麗な漆黒。投げ捨てられた希望のような星。
不意に、流れ星が恋しくなった、祈るように両手を合わせて、その隙間に息を吐いた。白い吐息が、視界を不鮮明にして、逃げる様に霧散する僅かな間に、数メートル先の闇が揺れているのを見つけた。

それが彼女だと、すぐに分かった。

イヤホンを肩にぶら下げたまま立ち上がる。所在無さげに両手をズボンのポケットに突っ込んで、緩みきった力才を左右に振って、無愛想な表情を繕えた。

急ぐ様に走ってきた彼女。一メートルぐらい距離をあけて立ち止まった。肩を下下に揺らして少し呼吸が乱れているが、息を深く吐く様に俯いて、力才をあげると少し不安げに見えた微笑みになっていた。

「え……ざき……くん。……ごめんね、急に呼び出したりして」まだ白い息がお収まらないうちに、前園間が言う。

「いや。……別にいいよ」無愛想な返事しかできないダメなオレ。

ちよっと大きめのダツフルコートに苺模様の尾翼みたいな手袋。ちらりとコートの裾からはみ出たチョコレート色のスカートが見えた。初めて見た彼女の私服に、オレは内心『かわいいー』なんて可愛くない声をあげていた。だが、それを決して表情に出さない。クールな表情を装う。

「あ、あのね……」

一瞬、視線が重なったと思うと、すぐに前園間が視線をそらした。そしてそのまま、その視線を、ダツフルコートのポケットに向けて、何か取り出した。

「これ……バレンタインのチョコレート……手作りだけど……」

少し腕を上げるようにして差し出されたのは、ウサギらしきキャラクタの包装紙につつまれて、十立方センチぐらいの箱だった。

オレは心の中で『うっひゃーっ、手作りって、マジか！ やっほーい！』と、棒高跳びをしながら叫んでいた。

だが、そこはクールに動揺を一切出さずに、箱を受け取った。

「……おいしくなかったら、ごめんね」上目遣いで、不安そうに前園間はそう言う。

でも、不味かろうが腐っていいようが、テトロドトキシが入っているようがオレは喰うぞ！ なんて事は決して口に出さず「ありがとな」と、微笑みもせず言うだけ。

「そ……それじゃあね」

前園間は九十度身体を回転させて、片手をあげた。

もう帰るらしい……って、もう帰るの？

「ああ、じゃあな」

本当はもう少し話しぐらいいたいのに、あっさり別れを返すオレ。

なんて根性なしだ。もう少しアグレッシブに行こうぜッ。いや、ここはちよっと

強気になったほうがこの場の雰囲気のバランスが取れるのではないのか。

そうだ、このまま告白しちまえ江崎マユ 十五才。好きだ、とか、付合ってくれて、たった二言だ。言え。言うのだオレ。マキシムスピリットよ目覚めよ！……そんなあ葛藤をしている間に、もう彼女は闇のフィルタの向こうへ……。

「ああ……マジ情けねえ……」

たった二言すら言えない。

カラオケなら、その言葉が入ったフレーズを高々と歌えるのに。

どうしてだろう。

好きな人の前で、二人きりの場所で、星や月さえ黙って見守ってくれる時間の間に、どうして、オレはたったそれだけの事を言うことが出来ないのだろう。

一人の時なら……、夢の中では……、歌の中では、ドラマのワンシーンのように言えるのに。

ダメだな……。

女の子は恋をすると綺麗になるって云うけど、

男は、格好悪いほど臆病になるだけだなんて。

ああ、情けなねえな、ホント……。

4

2015年

「ホント、格好わるいっすね、江崎さん。今もけっこう格好わるいですけど、昔は輪をかけて格好わるかったんすね」

思い出話を一区切りして、オレが持参した酎ハイで喉を潤すと、幸田がさらりと毒舌を披露した。

「っは。確かにガキの頃は情けなかったさ、自覚もしていた。だから、格好つけようとして、クールな奴を装っていたんだ。でも今は、そんな酷くはないぞ。……情けないか、オレ？」

「はい、ものすごく情けないです。これは第一印象があまりにもそれだったので、きつと……、私をエイリアンから庇うぐらいの事がないと、この評価は変わりませぬね」

金の計算を終えた幸田は、数分前から折り畳みのテーブルを取り出して、ノートを広げて大学の課題らしきものをしている。

テーブルの上には菓子と缶酎ハイ、それから幸田が食べ終えたカップラーメンとコーラと焼酎が入ったコップが置かれている。ちなみに、すべてオレの援助物資で

ある。

それなのに、ありがとゴザイ、とだけ言った後は無遠慮に食い漁ったあげくに、タバコをくわえながら毒舌を吐くという妙技を見せたのだ。

「覚えてますか江崎さん、最初に会ったときの事。私は覚えてますよ。……そう、あれはジメジメした六月の夜のことでした。私はレポートを書いていると、突然、

悲鳴が聴こえたのです。『ぎえええー』という品性も危機感も可愛らしさもない悲鳴でしたよ。それでも気になって、玄関を出てみると、隣のドアが少し開いていて、ちよつと覗いてみると、玄関の所で髪の毛ボサボサのおっさんが震えてるじゃないですか。しかも、腰を抜かして……。私が『どうしたんですか』って訊いたら、江崎さん、振り返って、カオをぶるぶる震わせながら『ぎよ ぎよ ギョギブリが……Gの奴が出たーっ』って訳分かんない事言って、部屋の奥を指差してるから、見てみれば……っは、たった一匹のゴキブリごときに大のオトナが、しかも三十の男が腰抜かして半泣きしてるなんて。情けなさすぎですよ、江崎さん」

軽蔑から、哀れむような眼差しでオレを見る幸田。

「しかたないだろ。人間誰しも、苦手なものが一つや百個はある。それにな、幸田。キミもちよつと女らしさっていうか、可愛らしさに欠けてるぞ。その時のGを、テイツシュ一枚越しに掴んで、トイレに流しただろ、慣れて手つきで堂々と……もうちよつと、きゃー、とか、私ムリムリとか言って両手を振ってみるとか……そんなアクションは出来ないの？」

「構造的には可能ですよ、でも、エネルギーの無駄でしょ、そういうアクション」

「かわいさゼロの返答だな。さすが理系……、幸田さ、昔からそうなの？」

「違いますよ。本当は私、保育士になりたかったんですけど実習で……」

幸田が視線を畳に向ける。口の橋を釣った表情を浮かべ、苦笑いを浮かべている。

オレは、その隙にタバコを一本拝借した。

「保育士で稼げないと考えたので、そこを中退して、建築学部がある大学に入ったんです。建築士の方が、年収よさそうですし」

「おまえは頭の悪い女子中学生か。金で仕事を選ぶのか？」

「はい、そうですよ。仕事と男は年収で選べ、というのが母の教えなので」

「あ、そう……。素敵なお母様ですこと」

「ええ。だから、間違っても江崎さんに落とされる事はありませんね」

「安心しろ、オレだって色気も可愛げもない幸田を落とそうなんて考えちゃいねえよ」

見つめ合い、いや、見下し合い沈黙。

一分ぐらい黙っていると、幸田はコーラを飲んで、新しいタバコを一本取り出しながら言った。

「それで、さっきの続き。どうなったんですか？ それと、人のタバコ勝手に吸わないでくださいよ、っていうか、吸われるんですね」

「ん？ ああ、二十歳で禁煙した。……でだ、バレンタインの後と云えば、ホワイトデイがあるだろ。だからさ、そこで告白しようと決心したんだよ、オレは」
久しぶりに口腔に広がる紫煙。

二十歳で禁煙したなんて言ったけど、本当は彼女と付き合いだしてから吸い始めて、別れてからもう止めてしまった。

懐かしい匂いと刺激。

舌に残った甘さを、容赦なく燻る。

浮かび上がるのは、何もかも鮮やかに……コーラのような刺激と爽やかさを伴った甘い思い出。

5

2000年 三月

ホワイトデイの一週間前。

オレは学校帰りに、地下鉄に乗って少し離れた地区のデパートに、お忍びで訪れた。

なんのためか？ それはもちろん、正面ロビーに入るなり設けられた青と白を基調とした飾り付けがされているコーナーへ向かうためである。要するに、バレンタインデイのお返しを買いに着たのだ。

色とりどりの飴にぬいぐるみ、可愛らしいアクセサリー類等々、まるでバレンタインフェアの使い回しのような飾りと雰囲気ですれらの物が陳列され売られている。これを男が買うのだ。一体どんな顔して買うのか不思議になって、ちょっと離れた場所で観察してみると、真剣に品定めしながら、ちよつと挙動不審に買う若い男性が多かった。それより年配、三十代ぐらいのスーツを着た人は、同じフロアにあるブランド物のショップに入って、堂々とした態度で、何万円の品物をプレゼント用に包装させて購入しているではないか。

さて、オレはどちらだ。

どちらでもない。

オレは結局悩んだあげく、何も買えなかった。何を渡せば前園間が喜ぶのか、考えてみたものの全然分らなかった。悶絶寸前まで考えた。デパートの最上階と地下二階を二往復しても、分らなかった。こんなに考えたのは、国立中学の入試以来だ。その時だって、全問答えを出したのに、この問題は適当と思われる解を求められなかった。

「すげーな、女って。なんで男が喜ぶ物が分るんだろ……」

得体の知れない自信を喪失して、訳の分らないまま負けたピエロの様に、地下鉄に乗って帰った。

そして、家に帰る前にコンビニに寄った。そこで、棚の一部が他の所より華やかに飾り付けされていた。デパートで見たのと同じ類いのフェアらしいが、規模や品揃えは小さい。でも、そこに並べられた一つの商品を、気付いたらオレは掴んでいた。小さなバスケットの中にウサギの形をしたキャンディーが入れられ、それをピニルで包んで青いリボンで閉じたもの。

オレは、それを買った。

選んだ理由は、勘だ。うん、我ながら中々男らしい理由だ。荒唐無稽で合理的根拠がないって理由で決断するあたりが、実に男らしい。

こうして無事、第一関門突破。

次は、どうやってこれを渡すかだが。これは前園間の手法を流用させてもらった。放課後。一ヶ月前に前園間からの伝言配達役だったクラス的女子を、ちよつと教室の外に呼び出して、伝言を頼んだ。

「今夜八時、ペンギン公園に来てくれ……って、前園間に伝えてくれないか」
「え……うん、分った。伝えるよ！」

その女子は喜んで伝言を預かってくれた。なぜ喜んでいたのかは分らない。錯覚かもしれない。なにせ、オレの精神状態は尋常ではなかった。

無事に第二関門を突破したものの、とうとう逃げ道を自分で発破して、土砂で埋めて塞いだようなものだから。

一ヶ月前より、確実に情緒不安定。部活をサボって家に直帰して、部屋に閉じこもって、一ヶ月前のように部屋の中をぐるぐる、と半径十センチぐらいのレールを走るように回って、ベッドに倒れ込んだ。そして、オレの精神安定剤になっている、スカイ・クロウの『キミニキス』を、イヤホンで聴いた。

『約束のように抱き合った』

目を瞑っても 君の温もり胸に届いてる

夜と闇の間 僕たちしかいない

喜びを逃がさないように 抱き合ってキスをしよう

触れて重なり 融けることさえ怖くない

好きだからの一言が、キスに溶けているから』

逆効果だった。落ち着くどころか、高揚してしまった。

だから、少し時間より早い家を出た。

一ヶ月ぶりのペンギン公園で、夜風に当たって、身体を冷やして心を落ち着かせ。なるほど、なぜ修行僧が滝に打たれるのか、なんとなく納得した。

覚醒を強制させるような寒さ。優しさを感じるほど無関心な静寂。まるで爆弾を抱えているような緊張感。目を瞑れば二つの言葉がオレをもっと緊張させる。

付合ってください。

オレもずっと好きだったんだ。

どれもありがたかりで、全然考えてない感じで格好わるいぞ、みたいな言葉ばかりだ。もうちよつと何かないか、なんていうか、こう……彼女の為だけの言葉っていうのは……。あまり回りくどいのも興醒めだし、ポエティカルだとナルシストみたいだし、シンプルに好きだ、っていうのも飽き飽きだし……。どうする、どうするの？ どうするのさ、オレ！

「え 江崎くん」

「ひゃいっ！」

突然背後から声。驚きのあまり奇声を発してしまい、後悔しつつ振り向くと、前園萌絵が居て、自己嫌悪がさらに倍、ゴールドハンマーで追い打ち、みたいな弛緩した表情を、頭の中のコントローラーできりりとクールフェイスに切り替える。

「ごめんね、遅くなって……」

「いや、そんなことないよ」偽装完了。

愛用しているらしいクリーム色のダッフルコートを着て、お気に入りらしい苺模様の手袋をはめているから、一ヶ月前の夜に戻った錯覚が過るが、彼女が頭の両側で髪をしばっている、丸いライオンのキャラクタがついたりボンは初めてみた。かわいい。うん、すごくグッド。

よし！ 時は満ちて勇氣無し！

言うんだ！ 言え！ 言っちゃまえ！ どんなに無様でもいいから言うんだオレ！

「これッ お返し！」 なんじゃそりゃッ。

腕を伸ばして、丁度身長差で彼女の眼前に突き出したのは、安物のキャンディバスケット。

もう、どうリアクションしていいか困ってるように、前園間は目を見開いて、突き出されたそれを凝視してる。エネルギーの伝達効率が悪い絡繰り人形のような動きで、キャンディバスケットを受け取って、更に顔に近づけて見ている。

もう死にたい。消えたい。穴があったら、落ちて笑いをとりたい。万力で頭を閉められている様な緊張と、恥ずかしさで顔だけがウェルカムサマー、みたいになっている。自己嫌悪で出来た金太郎飴。片手で顔を覆うって、もうこれ以上格好わるいワタシを見ないでッ、みたいな。

グッバイ初恋。アディオス青い春。そうだ、カルフォルニアへ行こう。

「あ………ありがとう………」 声。結晶的な綺麗な声だった。

鳥肌がスタンディングオベーション。

顔を覆っていた手をどけて見えたのは、彼女の笑顔だった。

アモルファスの涙を目尻に溜めて、白色のマトリクスを見せて、キャンディバスケットを抱きしめて、オレが知らなかった笑顔の彼女。

「え……」戸惑いが白熱した一瞬。

「うれしいよっ」

その一言で、思った。

女の子が、男が喜ぶものを知って買っているわけじゃなくて、好きな人から貰ったものだから、すごく嬉しいんだって。

彼女の笑顔を見て、オレはそう思ったんだ。

6

2015年

「え！ それで付合っただんですか？ 好きの一言も言ってないのに」

「二人の間に、そんな言葉は野暮なのさ」

「なんかズルいっすね」

自室から持って来たHDプレーヤーを小型スピーカーに取り付けて、スカイ・クワウの曲をBGMにして、思い出話を十分程語って一区切りした。

「しかし、信じられせんね」

幸田がシャーペンを薬指と中指の間に挟んで回しながら、言う。

「そんなに純粋な少年がなんで、女は力才だ、なんて退化的な事を言うようになったのでしょうか。分りませんね、ホントに……。分りますか江崎さん、この問題」

幸田はシャーペンでプリントの二問を指しながら尋ねた。式が途中で止まっていた。

「言っとくけど、今のオレは昔よりさらに濾過された純粋さを保っているぞ。……で、それは何だ、ポアズイウの法則か……。求め方は正しいが積分で計算間違っているから、平均流速の式に代入した時におかしくなってんだよ」

「あ、……。ああそうか、単純な計算ミスでしたね」

「1と2を間違えるのはまだ良いが、1と10のように桁を間違えるようようじゃエンジニア失格だぞ。気をつけろ」

「うう………肝に銘じておきます。……って、江崎さんって力学できるんですね、意外でした。漫画家ってどちらかというと文系よりだと思っていたので」

「一応国立大卒だしね、オレ。だから『理系少女漫画家』なんて呼ばれていることがたまにある。一度もそう名乗った事はないのだが……。舞台が理系の研究室とかよく使ってるからかな……。って、おまえ、読んだことないだろ、オレの漫画」

「はい」即答して、ノートに視線を戻して式を書き直していた。

「幸田さ、男と付合ったことないだろ」

「なえっ！」機敏に顔を上げた幸田。動揺と驚きを上手い具合に混ぜた表情で、少

し頬を赤くしている。

「何言ってんですか、もうっ。酔っぱらいオヤジですか、あなたは」

「いや、たださ……ちょっとした疑問だよ、ビールの泡ぐらいのさ……」

テーブルを挟んで向かい合って座って見ていると、本当に、泡のように浮かびあがった疑問。

顔を近づけて、幸田の顔を見てみると、造形は悪くはない。むしろ整った顔立ちだし、肌も綺麗だ。

「あと三秒で退いてくれないと、怒りますよ」

レンズ越しの幸田の目は見開いたまま。クルミのようなタバコの匂いがした。

「おまえさ、化粧とかしないの？ けっこう化けると思うけどな」

「え……」

「うん、マジでさ」そう言って、オレはもとの姿勢に戻った。

幸田は硬直状態で、シャーペンを回している。これは一体どういった感情表現なのだろうか、と三秒ほど考えた。

「で、どうなの？ 初々しい初恋話とかないの？」

「な、ないですよそんなもの！」

幸田は立ち上がって、台所へ向かった。冷蔵庫のドアが開いて閉じる音がした。

そして、戻って来た幸田の手にはコーラの缶が握られていた。着席して、コーラを一口のんで、溜息を吐いて二秒ほど黙ると、オレの方を見ずに言った。

「江崎さんばかり、話していただくのはフェアじゃないので言いますけど……」

幸田は恥ずかしげに視線を畳に向けて、体育座りになった。

オレは勝手に思い出話を話だして、どちらかと言えば迷惑に思われても当然なのに、それを律儀にバランスを取ろうとする幸田の性格は、可愛らしく思った。

「正直に言っても、無いんです。私、幼稚園からずっと女子大の付属だったんで、大学まで共学じゃなかったんです。だから……まあ……、そういう出逢いっていうのが、平均以下だったんですよ」

「へえ……女子校か、いいなそういうのも。なんていうか華やかかって感じて楽しんでください。ああ、女子校の教師という選択もあるな。うん、チラリズム的の男の口マンが見える」

「あ、そういう願望っていうか期待があるなら、止めた方が良いですよ。チラリズムって、まあ梅雨時だとまだ冬服でスカートの中、蒸すんですよ。だからパタパタとスカートめくったりする人もいましたけど、下着以外にも、夏には脇毛とかすね毛がチラチラ見えますね。……想像している以上に、遠慮というか秩序ないですよ、周りが同性ばかりだから」

「へえ……それはそれでまたマニアックな嗜好には堪らないが……。でも、そういう所で育つと、男に免疫がないんじゃないの？」

「当然、男の人と話したりするのが苦手な子もいますけど、それは別に女子校特有で

はなくて、個人の性格が支配的ではないでしょ」

「うん、そうだな。幸田は平気なんだな」

「はい。兄が二人いましたから」

「なるほど、だから、そんなに……」この先は言わない事にした。

「でも、江崎さんが初めてですよ。こうして、お酒飲みながら、バカみたいな話ができ、緊張も警戒もしない男の人って。あ、奇蹟の人です」

一瞬だけ、笑みを浮かべて、直ぐにコーラの缶に隠れた幸田の顔。

なぜか、前園間萌絵の笑顔がフラッシュバックした。

「なあ、幸田。それって喜んでいいのかな？」成人男性として。

「それは江崎さんの主観の問題ですから、私からは何も……。ところで、今流れている曲、これ知ってますよ」

そう言って、幸田はHDプレーヤーを指差した。

思い出話を中断してからもずっと再生し続けているのは、スカイ・クロウのアルバム。そして今流れているのは、二年ぐらい前にCMに使われていた曲。わりとメジャーな曲でもある。

「ああこれね。スカイ・クロウの中で三曲ぐらいしか知らない、バラードのラブソングなんだよ」

「へえ……。確か……。曲名なんでしたっけ？」

「これはね『ラブレターを待つ七月』っていう曲だよ。……。あ、ラブレターと言えは……」

「あれ、何かあるんですか？」

「うん。ラブレターにまつわる甘酸っぱい話があってね……」

幸田は黙って、軽く顔を傾けた。

オレはゆっくりと目を瞑る。

部屋の中に充填されたスカイ・クロウの歌。

「神さまにだって秘密にしている愛だから

そっと 手紙で お喋りだね

君の書いた言葉を見る度に 嬉しいけど

だけど やっぱり 声が聴きたい 君に触れてい

百枚の手紙なんかより たった一言の囁きが

毎日の手紙なんかより たった一夜の抱擁が

なによりオレ達には 必要なんだ

七月の夜 秘密の公園で会おう 終わりにしよう

昨日の君の想いを待つ熱帯夜を 終わりにしよう

神様が嫉妬するほど 君を抱きしめて毒々しいキスを 見せつけたい』

2000年 春

三年生に進級して奇跡的に、数学的には六分の一の確率で、オレと萌絵は同じクラスになった。だけど、学校では今までと変わりのない距離感。みんなには、付合ってる事を秘密にしているからだ。どちらが言い出した訳でも、話合った訳でもないけど、雰囲気という不思議な魔力によって、そういう事になった。

別にこれに対して、オレは文句はない。時々、学校内でイチャついてるバカツプルを見かけると、ああはなりたくないな、と酔っぱらって近所迷惑な音量で歌う大人を見た時と同じ様な事を思っていたから。

だから、付合って一ヶ月経っても、どうも緊張感というか見えない壁というか光学バリアというか、微妙な空気が換気されない。つまり、付合う事に慣れていない、という事だ。なにせ、デートだって未知の領域。ワームホールぐらい異次元めいている。

だから、オレは緊張している。

最近、やっと電話での沈黙占有率が三割を切って、話も続く様になった。そんな今日この頃、夜の九時。さっきの電話で、萌絵のほうから「明日、遊園地いかない？」と提案された。それはもう、素晴らしい根回しが水面下で行われていたかのような出来レース的に、その提案は承諾された。つまり、オレは即答で「いいね、行こうか」と言ったのだ。

デート。ああ、なんて甘い言葉。なんて香しいリズム。リピート。デ・エ・ト。うわあ、これこそザ・カップル。なんていうんですか、この緊張感。もう殺人的な糖度ですよ。

よし！ここはかつこ良くリードして……きゃっほいー。

「本当ならー今くオレのベッドには君がいるはずなのにー」

昂る気持ちが歌となる。スカイ・クロウの歌を熱唱して、気持ちを落ち着かせる……という気持ちはもう一分としないうちに崩壊。もう、眠れない夜。どんだん頭が冴えてしまう。どうしてこの状態が、テスト中には起きないの不思議だ。と、そんな訳もなにも因果はないが、初めてのデートでいきなり遅刻なんて古典的失敗を踏む事を避けるために、目覚まし時計をセットして、午前三時にやっと眠った。待ち合わせは朝の十時に駅前。

朝六時に起床。三時間睡眠でも、元気デス。グッバイ、スタミナドリンクぐらい元気です。

そして、約束の時間の一時間前に駅前に到着。バスターミナルの近くのベンチに座って瞑想。

頭の中で本日の目標を復唱。

「まず手を繋ごう。手をつなぐのだ。溶接ではない、手を繋ぐのだ。通電ではない。手を繋ぐのだ。そして、泡よくば……いや、あわよくば、きキスを……」

「おはよう」

「ひゃあい！」

至近距離で声が聴こえて目をあけると、昨日の記憶が霞むほど眩しい笑顔の萌絵がいた。鮮やかな朱鷺色のパーカーと白いスカート。パーカーの胸元の隙間からチエツクの模様が見えた。

オレの総人格が拍手喝采スタンディングオベーションで「すげーかわいいぞー」と叫んでいる。が、決してそんなこと言わず「ようっ」とだけ言う。

ターミナルの時計を見ると、約束の時間より三十分早かった。

電車に乗って、四駅先の遊園地へ向かった。大規模でもなければ公園ぐらいの規模でもない、目玉のアトラクションがあるという訳でもなければ、定番どころは落としていない。隣の県にある世界の遊園地より客は多くはないが、貸し切りみたいな客数でもない。十年後は潰れそうだが、二年後はきっとあるだろう。寂れているのか賑わっているのか、シーズンオフは間違

いなく寂れる遊園地。きつと修学旅行でここに来たら、文句ばかり吐いて、近くのゲームセンターにでも行こうと思う。だけど、彼女と一緒に来たというだけで、どんな遊園地よりも楽しみが溢れているように思えた。

ギシギシとパイプが軋むジェットコースター。焦れたい加速のゴーカート。錆ついたトランス構造が不安なフリーフォール。遠心力の人体実験みたいな空中ブランコ。やる気のない従業員ばかりのおぼけ屋敷。個人的に興味深かったのは円周三十メートルほどの豆電車なのだが、これはさすがに自粛して、観覧車に乗って、五分で後悔した。

話が続いたのはまだゴンドラが八分の一も進むまで、あとは、どうも視線を合わせるのも恥ずかしい雰囲気。この空気を換気したくとも、小さい窓しかない。ドラマやラブストーリー映画で、カップル+観覧車という数式ならば、キスシーンというのが定番なのに、とてもじゃないが、そんな勇氣もムードのベクトルは反対方向。気まぐれな雰囲気。離れるにも離れない。こんな密室より密室のほうがマシだ。

約三十分後、地上に降りたオレ達。見つめ合って苦笑い。こういうアトラクションなのか？

時間を見たらお昼を過ぎていたから、オレはハンバーガーを買って、彼女に渡した。

「おこつてあげる」

どこか座る場所でも無いかと辺りを見渡しながらバーガーを一口。

「あ……ありがとう……」

「いいよ、これぐらい」

フードショップの列の前のベンチは、既に満席。しかたが無いから立食パーティー形式で、バーガーを食べる。ふと、萌絵の方を見ると、少し離れて背中を見せて、もじもじとバーガーの髪包みを取ったり戻したりの繰り返し……。

まさか、嫌いだっただけか？

まいったな、なんてミスを……。

「あ、あれ……。あそこにいるの……ユカと三村くんじゃない？」

萌絵が指差す方を見ると、二人がいた。仲良く手を握って、風船なんかもってあ

るいている、クラスのパカッブルが居た。

「……………げっ」
「まづい。すっごくまづい。カボチャの煮物にミントのアイスを溶かしてかけたぐらいマズイ状況だ。」

ただでさオレ達が付合ってる事は隠しているのに、よりもよって噂話の送風機みたいな三村に見つかってはマズイ。しかもこんな遊園地でデートしてるなんて……ってそれはお互い様だから良いか……ってNO！ 良くないそんなの。

まだ向こうは気付いていないみたいだが、さて、どうしようか、どうすればいいのだ、どうするよ、どうすんのオレ！

「江崎くんッ」

オレの手を、柔らかくて熱い感触が掴む。

「逃げようッ」

萌絵がオレの手を掴んで、走り出そうとする。

啞然としていたオレに「ほら 早くっ」と言う。

彼女に引っぱられる様に、走った。

手を握って、オレ達は走った。

どんなアトラクションより心拍数があがって、どんな遊園地よりも嬉しかった。

想定外シチュエーションで手を握れたけど、予想通り、少し恥ずかしくて、でも

すごく嬉しかった。涙を内側で流れるほど嬉しかった。

もうそれだけで、今日が終わってもよかったと思っただけ。

オレ達の関係が一步前進したのだから。

空がオレンジ色に塗るのを忘れて照度を落とし始めた頃、遊園地を出た。いつのまにか、自然と手を繋いで歩いてた。

少しでも長く手を繋いでいたかったから、普段よりもゆっくり歩いた。

それでも地球は自転する。コリオリの法則は壊れない。歩けば別れ道に近づく。

もうすぐお別れだと思うと、だんだん会話は今日の思い出になってしまふ。

「なんか……ドタバタしたけど、楽しかったね」

「そうだね」

「また行こうね」

「ああ」

「あつ、そうだ」

萌絵が背負っていた小さなリュックに手を煎れて、何かを探し出した。そして、何か取り出した。

「はい、これ」そう言っただけでオレにそれを渡した。

受け取って見てみると、白い黄金比に似た長方形の封筒らしきものだった。

「学校であまりしゃべれないから………たまに書くね」

二秒沈黙。

ラヴレターだ！ そう気付いた時には既に彼女は「じゃあねー」と言っただけで手を振っていた。

家に帰って、オレはその封筒を爆弾処理をするように慎重に封を切って、手紙を取り出し、ベッドに飛び移って読んだ。

『江崎くんと、つきあえることになって』

ほんとうに、うれしいです。

ずっと好きだったから……

こんなわたしだけど、これからもよろしくね。

前園間萌絵

「きゃー、付合ってるのにラヴレターだなんて、かわいすぎるー」

「だろ？」

だいたい酒が回って来ているのか、普段の人格が崩壊しつつある幸田。それでも課題を着々と進めているあたり素晴らしい能力だ。

「あー、なんだか江崎さんが憎くなるほど、もったいない純情ガールですね」

「いやいや、オレも当時はけっこうな純情ボーイだったぞ」

「そうですね、今はGの奴ぐらい真っ黒っスけどね」

「容赦ない君も、同色だと思っただけだね」

一頻り笑うと、幸田は仰向けになった。

六畳の部屋には、物が少ない。小さなテレビとその周囲に高さ一メートル程の本棚と段ボールが三つあるぐらい。あとは、二ヶ月前にオレが誕生日にプレゼントした、今やクッション代わりに使われている大きなカピバラのぬいぐるみがあるぐらい。襖が開けっ放しの隣の部屋を覗くと、パイプベッドと『衣類』とマジックで書かれた

段ボール箱がある。基本的に物を溜め込まないのか、それともそんな余裕がないのか定かではないが、それでもとても女性の部屋だと素直に信じられないだろう。まだ、オレの部屋の方が夢と希望と筆記用具が溢れてファンシーだ。

「江崎さん。当然、ラヴレターの返事書いたんですよね？　なんて書いたんですか？」
「いや、それがさ……返事を書くかと思っただけ、いや、書いたんだよ。でもね、どうやらオレには秀才というのがなくて、最後までかけずじまい。夜遅くまで、何度も書き直したんだけど、読み直すと旅に出なくなる程恥ずかしいものだったから、結局、一枚も返せなかったんだ」

「うわあ。彼女がかわいそうですね。きつと、まだかなまだかなって江崎さんの返事を待ってたと思いますよ。それなのに、酷い男ですねー」

「いや、しかたないじゃないか。だってさ、なんていうか……言いたい事、伝えたい気持ちっていうのは沢山あったんだけど、それを文章にすると、すごく滑稽なんだよ。支離滅裂で、何が言いたいの？　って感じになってしまっただ。おまけに、字が汚いしね。だからさ……」

口に当てて傾けた缶には、もう一滴の甘さしかなかった。仕方が無いから、幸田の飲みかけのコーラを一口貰った。

「それでも……、それでもきつと、欲しかったと思いますよ。江崎さんからの手紙」

幸田が膝を抱えて、伏し目がちに呟いた。

ほんのり紅潮した頬が、微笑む様な形に。頭に巻いていたタオルを取ると、セミロングの黒髪が広がり、そのタオルで眼鏡の奥を拭いた。

窓から夜風が入ってくる。網戸によって削られた雀の涙ほどの、けれど乾燥した風が、酒気で火照った身体を冷ます。

「有理数を有理数で割ると、無理数になるか？」
「え？　……江崎さん？」

「1から10までの数を二組に分けて、それぞれを掛けた二つの数が一致するか？」
「あ、あの江崎さん？」

「ある屋敷に泥棒が入って金庫の中のお金を奪った。その金庫には犯人の指紋が両手とあと一つ、手の指紋が残されていた。なぜか？」

「えっと、江崎さん。大丈夫ですか？」
「円周率が 3・05より大きい事を証明せよ」

「え、今度はアルキメデス？」
「9を56743でかけて、各位を数を足して、一桁になった時の数は？」

「え、え、ちょっと待ってください、それは分ります。ええと……9です。9の倍数なら、何桁だって同じですよ」

「うん。そうだね」
「そうだねって……、江崎さん、頭大丈夫ですか？　酔っぱい過ぎじゃないんで

すか？」

「大丈夫……って、言える間に撤退したほうが良いね」

膝に手をかけて、ゆっくりと立ち上がる。身体が重く、立ち眩みがした。心配そうに幸田が腰を浮かしたが、片手で大丈夫だとジェスチャーした。

「それじゃあ、帰るわ。悪いね、長居しちゃって」

「いえ、それは構いません。飲食代が浮いて、課題も手伝っていただいたので助かりました」

テーブルの上に乱雑された空き缶類をビニル袋に入れて、HDプレイヤーをポケットにしまう。そして、玄関に向かおうとして足を踏み出すと、視界が傾いた。

「あつ、大丈夫ですか？」幸田が咄嗟に立ち上がって、肩に手をかけてくれた。

「ああ、大丈夫大丈夫。ちよっと最近、徹夜続きだったから、ちよっと眠気が」

「目眩の間違いじゃないですか。部屋まで肩かましましたか？」

「いや、ホント、大丈夫だから。ありがと」

「そうですね。……とここで、さっきの訳分かんない問題、何ですか？」

「ん？　……あれはね、同じ様なものを萌絵にも出したんだ。彼女、なんだっけミステリー？　そういうのが好きでね、よくその手の問題を会話が続かなくなった時に出してくれたんだよ。それで、オレもなにか面白い問題を、と思っただ」

「中学生の頃ですよ。私も難しいものを……意地悪だったんです。江崎さん」

「ははっ……、ああ、同じ様なことを言われたな、問題が分らないって。……賢かったんだよね、彼女。そう、問題を解決するプロセスの中で、最も難関で重要なのは、問題を認識することだ。同じ様なものが数学の応用問題だな。文章から式を求める事ができれば、その問題を解いたと言っても良いだろう」

「江崎さん……、もう休まれたほうが良いですよ」

「そうですね。……じゃあまたな、幸田」

「はい。お大事に」

「え、何を大事に？」

「おやすみなさい」

幸田が申し訳程度の笑顔で手を振るから、オレもそれ以上にも言わずに手を振って部屋を出た。

そして回れ右。五歩ぐらいで我が部屋に到着。

同じアパートだから、幸田の部屋と間取りは同じ。だけど、そこに在る匂いとか温もりとか色とか音なんかは、まったく違う。ホント、幸田の部屋からオレの部屋までの間に、四次元を通って、地球を九十度渡ったぐらい、違う場所に思える。

ゴミが入ったビニル袋を台所のゴミ箱に放り投げて、寢室のベッドの上に倒れ込んだ。

頭の中が重たい。思考の粘性が高く、考えると抵抗の摩擦熱で身体が熱くなる。怠い。沈んでいく錯覚。口の中に、タバコの苦みと、かすかな甘みが探したら見つ

かった。

ポケットに入れていたHDプレーヤーのイヤホンを取り出して、耳につける。それから音量を下げて、音楽を再生させた。もう十七年ぐらい前の曲。でも、もしかしたらスカイ・クロウの楽曲で、これが一番メジャかもしれない。

熱い。

オレの全てが溶けて混ざり合ってしまった。もう、昔も、溶けてしまいたい。

この熱は何のせい？ お酒だろうか。仕事疲れたらどうか。軽々しく彼女との思い出を喋ってしまったせいだろうか。……、それな、良いのにな。

懐かしい……。昔が懐かしいなんて思ってしまうほど、オレは歳をとってしまった。未来を思い描くより、昔を思い浮かべる事が多くなったのが、その証拠だろう。それを大人と呼ぶのかもしれない。

もう、十五才の時ほどドキドキしたり、感情が抑制できないなんて事もすくなくなくなった。不思議だと惹かれたり、素晴らしいと感動したり、世界には二人しかいないと錯覚するほど誰かを愛したのは、……さて、何時ぶりだろうか。十五年。たった三文字の年月。その間にぎっと色々なものを、切り捨てたのだろう。

知識を得て、好きだった不思議を壊してきた。仕組みとプロセスを考え、感動に冷たくしてきた。試験体を観察するように他人の恋愛を傍観し、虚構の世界で練り作る、愛されも愛もしない観測者。

おかしいな……。なんで、オレ……。泣いてんだ？

身体の中を蠢く熱に、胸が潰れてしまうほどの苦しんで、涙が滲む。こんなこと……。そうだ……。初めてキスした時の夜に似ていた。

『午前二時 月の叫びが 甘く誘う刹那』

どうして あなたは 僕のベッドにいないんだ

さっきまで一緒にタブーと秘密の底を泳いでいたのに
何も言わずに 出て行ってしまったんだい？

世界中が望んだどんな瞬間より あなた

あなたと一緒にいる時間 僕も生きたい

なぜこんなにも夜毎 君に惹かれてしまう

本当なら 今 オレのベッドには君がいるはずなのに

呼び合う様に 求め合う様に 愛しあいたいから出逢ったはずなのに

君は今 誰の隣で泣いているの？

三日前からの曇り日のせいか、その日は少し寒かった。夏休みが終わって、節操のない季節が、秋に早々と鞍替えしたようだ。

休み明けのテストも終わった日曜日。萌絵の提案で、オレ達は海へ行っただ。

夏休みの間、オレたちは学校以外では、二回しか会えなかった。しかも、互いの自宅から半径十キロ圏内。二人でどこか遊びにいった事がなかった。だからなのかもしれない、オレはもちろん、萌絵もなんだがいつもよりハシヤいであるように見える。

海岸沿いの道から砂浜を眺めると、人はまばらで、泳いでる人はいなかった。素晴らしい人口密度の低さだ。

オレ達は手を繋いで、砂浜におりた。

深い絨毯のような砂浜に、思う様に歩く事ができないから、靴を脱いだ。最初はくすぐったかったけど、いつの間にか、歩く度に軋む砂の音が面白くなっていった。横を向いたら、海水を吸った砂のような彼女の薄い黒色の髪が、波のようになびいていた。

目が合うと、一瞬視線をそらして、笑顔で振り向いてくれる。頬が、陽射しを浴びて大理石のように内側から微かな光を放っている奴なんて一人いれば奇蹟だ。

「最近ね、スカイ・クロウ、聴いてるんだ」萌絵が嬉しそうに笑って、そう言った。夏休み前に発売されたスカイ・クロウのアルバムを、夏休みに彼女に貸した。きくと、それを聴いているのだろう。

オレがスカイ・クロウが好きだって、何時だったか話した事があった。だけど、彼女はそのバンドを知らなかった。クラスで知っている奴なんて一人いれば奇蹟だと思っただけだから、彼女の反応は想定内だった。

どうしてだろう。自分が好きな物を、自分が好きな人にも好きになって欲しい、もしくは同じ趣味・価値観だと思いついて、教えたいという衝動がたまにある。あまりスマートではないと思っていたのに、そんな行動を起こしてしまうとは、天使でも悪魔でもなく、あくまでも魔がさしたからだ、と信じ込んでいる。

「へえ、どんな曲が好き？」これは天使が不在だったから出た言葉に違いない。「ええっとね……『雲に散る雫』と『月叫』に、それから『ラヴレター』を待つ7月」なんかが好きかな。……あ、でもね、今CMでスカイ・クロウの曲が流れてるでしょ？」

「ん？ ……ああ、『僕と君と月が泣く夜』か」

「うん、それっ。薄暗くてカッコいい曲と、どこか悲しい歌詞を歌うヴォーカルの

有効である可能性は少ないので、素直に引退するか相談役に回ることにしよという教訓だ。きつと……。

コンビニで今日の食料を調達して、部屋に戻ってから十分程経って、幸田がやってきた。これからどこか出かける予定なのか、服装はジャージではなく、白のシャツにジーパンに変わっていた。それでも、やはり、なにか、どうしてだろう、悲しくなってしまう。マンガのキャラにだって、こんな服装は描かない。

幸田を仕事部屋のソファに座らせて、コーラとコーヒーをテーブルに置いてからオレは、仕事机の椅子に座った。

「いつきても、節操のない部屋ですね」

幸田はコーラを飲みながら、部屋を見渡している。呆れていますよ、みたい表情で、哀れな眼差しで部屋を観察している。これは、オレの部屋に来た時の定番の動作になっている。

節操がないと言うが、自分としては実に統一した品々が溢れる部屋だと認識している。窓際の仕事机が、もっとも高い重力場のように、玩具類が密集している。机の上の筆記用具と資料とビニル人形、ミニカーの縦列駐車。机の両サイドにはクマとカピバラのヌイグルミ群。ソファとテーブルの下にはGゲージの鉄道模型のエンドレス。本棚と骨格人形、その隣にはゴシック系の等身大人人形が、静かに見守っている。

「なんか、夜は怖いですよ、この部屋。この無秩序感」

「そうか？　むしろ夜からが楽しくなるんだけどな。このオレの趣味で統一された部屋は」

「とても同じ間取りとは思えませんね」

「そこに誰がいるかによって内部は左右される。外部は有象無象によって構築される瑣末なものだよ。それは人の心のありかたと……」

「あ、江崎ん、灰皿ありますか？」

「てめえ、人の話を聞けよ。それとここ禁煙」

「つち。つままない男ですね」

「いや、おまえにだけは言われたくないな、それ。……で、何か用でもあるのか？

それとも、メシでもたかりに来たか？」

「ごちそうしていただけるのでしたら、ありがたく頂きますよ」

「いや、言ってみたものの、冷蔵庫の中は冷麺しかないから」コーヒーを一口飲んで、幸田を見た。「それで、話があるの？」と尋ねた。

「話がある、というよりも、そうですね……昨日の続きがちょっと気になったので、

大学に行くまえに、それを消化しておこうと思ったのです」

「続きって……。続きもなにも、あれで完結してるんだけどな。だってさ、彼女と

は高校に進学して半年ぐらいで別れたんだから」

「あ……。……そうでしたね。……どうして、別れたのか、訊いてもいいで

すか？」

「別にいいけどさ、きつと、つままないよ」

「そんなの昨日のうちに覚悟してます」

「……かわいくねえな、マジで」コーヒーを一気に飲み干して、座り直して足を組んだ。少し、瞬きより長く目を瞑る。それだけで過る、十五年前の彼女とオレ。

色褪せてしまった映像。日焼けしたフィルム。霞んだ音楽。もう、聴けない声。触れる事がない、人。一瞬で、思い出されるのは、言葉にするには、十夜ほしい程の情報量。

「三年の終わり頃から、受験があるから一緒にいられる時間、話したりできる時間ってのが少なくなって、中学卒業してから、お互い別々の高校に進学したんだ。彼女は付属の私立、オレは高専。そうなる、今まで以上に距離が出来て、会うことも話す時間も少なくなった。今だと、互いの距離なんていくらだって克服できる技術があるのにな」

「……それで、自然消滅したんですか？」

「まあ、自然がどういう状態か分らないけど、別れたことは確かだね。……いや、そもそも、恋愛自体が自然に反することかもしれないなら、それは、自然回帰なのかもしれない。ま、人間が感じる自然なんてその程度のものってことだよ」

「私達が認識している自然の殆どは、人工物、という事ですか？」

「あれ、めずらしく意味なしトークに合わせてくれたね。どういう風の吹き回し？」

「なんか台風みたいですね」

「あ、それ言いたかったな……。……でもさ、幸田。どうしたの？　昨日は他人の昔話には興味有りません、みたいな感じだったのに、今朝はずいぶん積極的じゃん」

「え、つと……、参考程度というか、サンプルというか何と云いますか……」

「ま、不覚にも深く詮索はしないけど……」

「はい。覚悟ができるまで、気付かないでください」

「え？　なんの覚悟？」

「あ、そうだ。ちよつと江崎さんっ」幸田豹変。

テーブルを叩いて、詰め寄る様に身を乗り出して睨む。

「江崎さんが話してくれた思い出が本当なら、なんで、女は力才だなんて不純を崇拜しているんですか？」

「え？　……なんだ、そんなことか」

「そんなことなんて。優しい人とか、性格が良いとか、暖かいとか淑やかとか、そういう女性が良いかと思いませんか？　人は顔じゃない、中身が大切なんだって、思いませんか？　これっぽっちも」

「では訊くが、幸田、君は人をどう認識する？　どの器官を使う？」

「え？　認識？　器官って……五感のことですよ？」

「そうだ」

「でしたら……目とか耳とか……」

「初対面の人に対して、いきなり匂いを嗅いだり、手を握ったり、舐めたりする人は、極少数だろ。耳も、寡黙な人と得られる情報は少ない。だいたい、視覚をたよりに、その人の情報を得るだろ。……幸田が言った様な性格とか気質、優しさか誠実さとか、そういうったもの、どうやって知るの？ 心の目なんて言うなよ。それらは概念でしかない。だけど、それを認識できるのは、それが伺える、推測できる形で表れるからだろ。表情や仕草、言葉遣いもそうだが、殆どが視覚的情報だ。……女は力才だ、とか言ってるけど、別に力才だけ見てる訳じゃない。オレは人を視てる。誰も、性格や気質なんかで好みの人を選んでるわけじゃない、もしそうならそいつは偽善だ。力才、その人の見た目の印象で、見えないものを思い込んで、好みのタイプなんて枷で振り分けて、好きになれると思う人を選んでるんじゃないのか」

話終えると、オレはコーヒを煎れ直すために、部屋を出た。

幸田が言いたい事は分る。とても綺麗だと思う、それが間違いだと否定するつもりもない。説得しようとする気はさらさらない。たとえ明らかな勘違いだとしても、その人の思考を、オレは尊重したい。その思考と歴史は尊いと思うから。煎れ直したコーヒと新しいコーラ、それから灰皿代わりの鉢植えを持って、部屋に戻った。

幸田が俯いて片手で口元を覆い、考え込むような仕草をしていた。オレの戯れ言めいた言葉に、そこまで素直に消化しようとする幸田の律儀な姿勢は、ちょっと好意が持てるが、悪い気もした。

「あまり考え込むな。考えないという回路も必要だぞ。ほい、おかわりどうぞ」

「あ、ありがとうございます。……いえ、少し驚きました。江崎さんってぼけっとながら生きてるように見えたので、まさか、そんな思想があつての言葉だとは……。さすが、伊達に三十年も生きてませんね」

「ほんの僅かでも、オマエに好意を持った自分が憎い」

「あ、い、いえ、ちがいますよ、そんな悪い印象で言った訳じゃ……。あれですよ、あれ、なんていうか……そうっ、能ある鷹は爪隠す、です。私が浅はかでした。きつと第一印象で決めつけていたんですね。ここに引越して来て、初めて江崎さんを見た時、一週間ぐらい野宿したような姿でしたし、たまに見かけるのはラフな格好で、アパートの前でコンビニ弁当を食べてる姿とか、平日の昼間からビール片手に近所を散歩してる所とか、たまに奇声が聴こえてくるぐらいだったので、仕事もせずに部屋に籠ってぼーっとと人生を消化するしか能のない、終わった人だとはかり、私……」

「おまえ……そんな風にオレを……」

「でも！ でもですよ。江崎さんと話するようになって、結構、考えを改めました。

ええ、私が浅はかでした。昨日だって、まさかこんな人でも国立大を卒業できるんだって、なんだか自信がつかました」

「いや、フォロワーになってないよ。見下してバカにしてるだろ」

「そんなことないですって。ホント。……本当に、そんなことないですよ……、すごいと思ってますよ、本当に……。羨ましいです……」新しいコーラに口をつけて、少し俯いてから、顔と缶を持ち上げた。

コーラをテーブルに置くと、今度はタバコを取り出して、唇で挟んで火をつけた。紫煙が漂って、昇って拡散する。

見えていたものが、見えなくなっていく。それが何かに似ているように思えて、だけど、それが何に似ているのか思い出せなかった。

「幸田。まだ時間ある？」

「え？ ……三時間ぐらいありますけど」

「映画観る？」

「……はい」

ソファに並んで座って、二年前の映画を一緒に観た。

窓のブラインドをおろしても、アパートの周りの木々の隙間からの陽射しは輝く。風が吹くたびに、揺れる光。いつか見た、海の視線に似ていた。

噂では大した事無い映画と聴いたけど、やっぱり、そういうのは当てにならない。特に、大多数と感覚がズレた人間には。それはどうやら、幸田も一緒らしい。ま、平日の朝から映画観るなんて、少数派だからかな。

映画が終わったのはお昼前。

幸田はこれから講義だかゼミがあるらしく、コーラを飲み干すと、部屋を足早に出て行った。

「幸田。夜、メシ食いにいくか？」

「江崎さんのおごりでしたら、ごちそうになります」

「ああ。じゃあ、バイト終わったら電話してくれ」

「はい」

そして、玄関を出てドアを閉めた。すると、またドアが開いて、幸田が顔だけ覗いて、オレを呼んだ。

「江崎さん。……彼女のこと、まだ好きですか？」

「そう言い残して、ドアは閉まった。」

「即答できなかった。」

でも、好きかと訊かれれば、好きに決まってる。だってオレ達は、いや、すくなくともオレは、彼女が嫌いだから、憎いから別れたわけじゃない。好きだった。愛しかった。それでも、別れようと言ったのは、オレ。どうして、嫌いになれる。

電話の着信音で、妄念のカーテンが開かれた。

仕事机の上の携帯電話を持って、ディスプレイに見慣れない番号が表示されてい

たが、そのまま電話に出た。

「はい、もしもし」

『おう、おつかれー。マユ生きてる?』

「はいはい、生きてますよ。三村か? また番号変えた?」

『さすが、声で分るとはすごいな。って、そんなことより、すげーニュースがあるだけで聴きたい?』

「そのすげーニュースを言いたければ、聴くよ」

『こないだ、ウチのカミさんが、栄のデパートでさ……………誰に会ったと思う?』

「地球内生命体」

『……………萌絵だよ萌絵! 前園間萌絵だよ!』

「へえ……………え?」呼吸が、一瞬、固まった。

『どう、驚いた?』

「う……………うん、驚いた」

『あ? ずいぶん素直なりアクション。何? 締め切り前?』

「うん、締め切りがある限り、締め切り前」

『おつ、戻って来た。……………それでさ、マユ。昔の女に会いたくない?』

「え……………ええ!」

『カミさんがさ、オレ等がまだマユと連絡取り合ってるって話したらしくてさ。それしたら、前園間がおまえに会いたいわってさ』

「ちょ……………ちょっと待って……………」

『それで、明日、飲み会をセッティングしたから、絶対に来いよ』

『何言ってるんだよ、オレら、十五年ぶりなんだぞ、それなのにいきなり明日……………』

『ま、いいじゃん。きつと面白いことになるぜ』

「いや、面白いのはおまえだろ」

『あ、バレた? とにかく絶対に来るように! じゃ、アデュー』

通話終了。電子音だけがまだ聴こえる。

タバコの匂が残る部屋に立ち尽くしていた。

ブラインドの隙間からの光のキャンパスに、彼女の姿が浮かぶ。信じられない。

うそだろ。

萌絵が、オレに会いたいなんて思うはずが……………。だって、あんなに辛い別れかたをしたのに……………。会いたいなんて……………。

オレは、彼女に会うことを許されるのか……………。

2001年

夜。電話越しの彼女の声に、ほつれてしまった刺繍を連想した

『もうすぐ……………卒業式……………だね』

「ああ、そうだな。まだ高校の合格発表まだだから、心底楽しめないな」

『大丈夫だよ……………、江崎くんなら……………大丈夫』

「……………どっちにしても別々の高校になるな」

『うん。……………だから、ね……………』

「ん? なに?」

『あ……………ううん。なんでもない……………』

彼女が言いたかったことは、薄々気付いていた。

付き合いつて一年経つけど、オレ達はまだ一緒に帰った事がない。

だから、きつと、彼女は待っているのかもしれない。オレが、一緒に帰ろう、と言うのを待っているのかもしれない、そう思った。

卒業式の日。

今日ぐらいは一緒に帰ろう、とオレは言おうと思った。だけど、言えなかった。校門前で友達と喋る彼女を見た。一瞬、オレを見た。

その時の、悲しそうな表情を浮かべたのを、オレは見ってしまった。

思い出す度に、ナイフが胸に突き刺さって、欲しかった言葉を探ろうとする。

彼女が見せたどんな表情よりも、その一瞬が、何よりもオレに語りかける。どうして、と。

中学校を卒業して、オレ達は別々の高校へ進学した。

電話で話す時間も減った。たまに会っても、もどかしさが積もるばかり。キス以上の進展はなかった。それに、キスをするたびに、二人の関係を計る砂時計が、零れ落ちてしまう気がした。

そして、砂は全て零れ落ちてしまふ日がきた。

初めて、彼女から呼び出された。デートで何度か訪れた事がある喫茶店。窓際の一番奥の席に、彼女は座っていた。

オレは挨拶を交わして、コーヒーを注文した。コーヒーが持って来られ、それを何度か口にするまで、彼女は何も言わなかった。オレも黙って、彼女の言葉を待った。

タバコを取り出して、漂う紫煙を眺めた。

「クラス男子に告白されたの」

「え……………」一瞬の動揺を隠そうと、カップに口をつけた。「そう……………」

「えっ。……………それだけ？」

「何かがひび割れる音を聞いた。」

「他になんて言えばいいんだ」タバコを吸って、彼女から顔を背けた。見られたくなかった。

オレは最低だ。

彼女がオレを試そうとしているのに、気付いた。

きつと彼女が、オレに与えてくれた最後のチャンスだと分っていた。

「ただ、ガムシヤラらになつて彼女を引き止める事が出来るオレなら、今頃きつと、彼女について知らない事はなにもないはず。月が叫ぶ頃に、オレのベッドに彼女がいることだつてあつただろう。一緒に笑つて、何かに感動することだつてあつたはず。手紙だつて返せなかつた。一緒に帰ることだつて……………」

はじめて、タバコとコーヒーが、痛いほど不味いと思つた。

「わたし……………その人のこと、好きかも……………」

「別れたい？」

「……………うん」

砂時計の砂がすべて落ちる音が聴こえた。

彼女の顔を見た瞬間、終つたと思つた。

眉をよせ、だけど真剣な眼差しで凜とした表情をした彼女を、初めて見た。

オレの知らない彼女が、そこにいた。

「別れよう」

テーブルに突き刺す様に言い残し、オレは店の外へ向かつた。

後ろから、彼女の声が聴こえた気がした。

彼女から、押し殺した泣き声が、聴こえた気がした。

それがいつまでも耳に残る。

家に帰つて、ベッドに潜つて耳を塞いでも聴こえる。

だからイヤホンで耳を塞いで、スカイ・クロウの音楽で掻き消した。

『もしも神様が 僕から全てを奪おうとしても

あなただけは 抱きしめて 離したくはない

失うことが ああ 僕が消えてしまうより恐ろしい』

一年八ヶ月の時間。オレは一体、彼女のため何をしただろうか。

彼女が望むもの 一つでも 叶えてあげられたらどうか。

暗闇に光。オレを見る彼女の笑顔が、繰り返し、繰り返し、輝き続ける。

『好きです。

あなたを愛する誰よりも

あなたが愛する誰よりも
僕は、あなたが好きです』

オレは嫌いだ、自分が大ッ嫌いだ。

なんで、別れようなんて言うんだ。

どうして、引き止めようとしなかつた。

なぜ、泣いてしまうほど好きなのに、終つてしまつた。

「……………も ……え……………萌絵……………」

一度も呼ばなかつた、彼女の名前。

一度も言えなかつた、好きだと。

一度も返せなかつた、手紙を。

沢山のを、彼女から貰つたのに、

オレは、何一つだつて返せなかつた。

受け取つてばかりだつた。

言葉も、手紙も、笑顔も。

『終つてしまつた恋に

結ばれなかつた恋に

離れてしまつた愛に

意味はあるのかな？

君の声を聴かせて、

僕はもう見つけたよ

意味は 君の中にある』

1 2

午後八時。

打ち合わせが終わつて、バイト帰りの幸田と合流して夕食。どこか店に入って食べるのは金も時間もかかつて自由度が低いという事で、牛丼と酒、コーラ、菓子類を買い込んで、幸田の部屋へ。

そして幸田に、明日十五年ぶりに前園間萌絵と会うことを話した。

「うわあ、大気圏突入じゃないですか、江崎さん」

「燃え尽きとるよ、成層圏で」

メインディッシュを食べ終え、幸田はコーラとタバコ、オレは耐ハイと飴を装備

して、テーブルには菓子を広げた。

「しかし、あまりにもタイムリーですね。シンクロニシティですかね？」

「ん？ シンクル？ ……ああ、ユングか。さて、どうだろね。オレが描く漫画なら、こんな都合良過ぎる展開はあざとくて使わないな」

「でしようね。だが、これは……」

「そう、漫画ではない。避けられない潮時がそこにはある、みたいな。ああ、潮時、好機かもな、ホント」

「行くんですか、江崎さん？」

「行くだろうね、明日のオレは」

「わたしは、行かないで欲しいです」

「え？ ……幸田、なに言ってるんだ？」

「だって今日、沢山課題が出たので、江崎さんに手伝って欲しいんです」

「……………性格ブス」

「なんですか、その暴言は！ 私、あなたが好きだから行かないで欲しい、とか女子に言われたかったですか？」

「いやー、言われてみたいが、その範囲から幸田は除外だろ」

「どうしてですか！」

「いや、だってさ……………かわいくない」

「……………最低ですね」

「そう、最低なオレには、君の課題を手伝うことが出来ない」

「あッ、そ、それはちょっと話が違います。ホント、今日のはちょっと難しいというか、量もあるし、私、苦手なんですよ物理が」

「それでよく建築学部に入ったな」

「とにかくお願いします」そういって、幸田は鞆からどっさりノートやプリント類を机の上に置いた。お菓子を押しつけて。

どう見積もって、一週間かけてやるような量ではないかとオレは見た。

「あ、ちなみに、江崎さんの最終学歴は？」

「国立H大学院博士課程修了。ドクタ・エザキです」

「うわあ！ ホントですか、それ。H大って私と同じ、先輩ですか？ 今、江崎さんに会って一番の衝撃を受けました。……………それでしたら、お願いします」

「いや、そういうのは自分で解こうね。教えるのはまだ良いけど、やるのはアカンよ」

「ツチ。いじわる」

足を組んで、不遜な態度でクッション代わりになっているカピバラのぬいぐるみによりかかる幸田。タバコを取り出し、火をつけてテーブルの上の課題を畳の上に移動させた。諦めたらしい。

「冗談はさておき」幸田が姿勢を正して座り直した。

いや、冗談じゃなかっただろ、絶対。

「本当に行く気ですか？ わざわざ自分がまき散らした過去を見にくようなものですよ」

「それはちょっと言い過ぎだな。……………でも、そうだな、近いな、それ」

腕を伸ばして、幸田からタバコを一本貰った。差し出されたライターで火をつけて、深く吸う。一瞬鋭い乾燥感。甘みが隠れた苦さが広がる。

「なあ、幸田。……………どうすれば良いと思う？」

「どうしたんですか、そんな弱気なこと言って、江崎さんらしくないですよ」

「そうかな？」

「ええ。江崎さんはもつと傲慢で強気で、唯我独尊な感じで……………我が俣で……………ええつとあとは……………」

「ストツプ。分ったからお願い、もう十分。……………はあー。ただカッコつけようと強がってるだけだよ、幸田が見てるオレは。ホントのところは、けっこう臆病で弱虫なんだよ。でなきゃ、昔の女に会うだけで、こんなにビビるかっての」

「怖いんですか？」

「怖いね。うん、すごく怖い。彼女がじゃなくてだよ。……………彼女と会うと、やっとの思いで脱ぎ捨てたはずの、あの頃のオレが出てきそうで怖いんだ。……………でも会いたいって思う。会って……………一つでも……………一つでも何か返したいんだ彼女に。……………渡し忘れたものが多すぎるんだよ、オレには、さ……………」

だから、会わないといけない、と思ってしまう。

でも、いまさらオレに何が出来る、と怒鳴る自分もいる。

我が俣を言えば、彼女に忘れてほしい、オレの事を。

忘却の瞬間、卑怯と怒鳴られてもかまわないから、あの恋を無かった事に……………

「どうしようか、幸田。オレ、会ってもいいのかな」

「会いたいなら会えばいいと思います。江崎さんの人生です、江崎さんが決めるべきです。私は……………、江崎さんが思考を、尊重したいです」

まっすぐ凜とした眼差しをオレに向け、幸田がくれた言葉。それが、ひどく懐かしく感じた。いつか、オレが選んだ言葉に似ていた。

萌絵との別れ話の時。オレは彼女に「別れたい？」と訊いた。彼女は、うん、と答えた。それが彼女の考えた答え。彼女が好きだから、彼女の考えを尊重しようという偽善が、オレに「別れよう」という言葉をえぐり出したのかもしれない。

でも幸田の言葉は、あの時のオレの言葉とは違う。幸田は、偽善でそんな事を言

ってはいない。それは、あの時の彼女と同じような表情を、幸田が浮かべているか

ら。きつと、嘘はないと、信じたい。

「よし！ 覚悟決めて挑もう」

「そうですよ、いつまでもウジウジしてたらダメです。……………よし！ 私も覚悟決

めました」

「ん？ なんの覚悟？」

「それは秘密です」

「そう。……あ。朝の映画の続編、借りて来たんだけど、観る？」

「はい。観ます」

「でもさ、課題は良いの？」

「大丈夫です。江崎さんに手伝ってもらいますから、絶対に。これは私の考えです。尊重してくださいね」

「いや、それは用法が違うと思うが……」

1 3

昼間に仕事を片付けて、夕方になってから部屋を出た。

久しぶりに服装とか髪型とか気を使って、覚悟を決めて、イヤホンを耳にかけて音楽を聴きながら、玄関をドアをあけて、待ち合わせ場所の駅へ向かおうとした。

だが、その前に事件です。

「……………えっと……………」

ドアを開けて、外に出ると、隣の部屋から女性が出て来た。

目が合う。

ミユール。ふくらはぎまでのデニムパンツ。淡いピンク色のキャミソール。ムササビみたいな上着。眼鏡はない。艶やかな黒髪を後頭部で団子のように結んでいる。顔の輪郭。全体の骨格。各部位の位置や大きさは、ある人物と一致しているのだが、あきらかに別人ではないだろうか。

「どうしたんですか、江崎さん」その女性は、綺麗な二重でオレの方を見ながら言った。

「……………どちら様？」

「幸田ですが」

「うそ！ だって、おまえ……………、その格好、どうしたの？」
いつもジャージ上下の女が、なぜにここまで変貌するのか。

天変地異を予言しているのか君は、みたいな。

「へ、変ですか、そんなに……………」

「うん。…いや、変じゃないよ。変だけど、変じゃない。うん、似合ってる」

「よかったー」

「でも、なぜにいきなり……………」

「私、今から合コンに行きます」

「へえ……………え？」

自分の可聴領域を疑った。何か聞き逃したか、聴こえすぎたか。幸田の言葉を理解するのに四秒かかった。まさか、まさかあの幸田から、合コンに行く、なんて動詞が聞くととは……………、夢でも見たくなかった。

「えっと……………昨日言ってた覚悟って、まさかこのこと？」

「江崎さんは、これから昔の彼女に会いにいかれるんですよね」

「う、うん、そうだけど……………ま、飲み会ね」

「私、負けませんか。ではっ」

そんな訳が分らぬ挑戦状を言い残して、幸田は足早にどこかへ行ってしまった。残像が、脳裏に保存される。

なんだか、目眩がするほどの違和感が、気持ち悪かった。

出鼻をくじかれた気分だ。いや、出鼻を捻られたか、真っ赤になったか。どちらにしても、かなりの衝撃を、ダメージを受けてしまった。

気分を切り替えようと、音楽を聞きながら、歩いて駅まで向かう。そこから、電車に乗って四駅ほど離れた場所まで行く。そこは、沢山の思い出が生まれた町。通っていた中学校がある。今、そこがどうなっているか分らないが、帰り道のキンモクセイの匂いが、一瞬、蘇った。

駅の出口付近で、三村夫妻と合流した。

挨拶をするほど他人ではないから、互いの近況を五分ぐらい話して、他の参加者を待っていた。

「あの……………トイレ行ってキテイイッスか？」喉が乾く痙攣する。

「はあ？ 二十分の間で四回目だぞ。落ち着け」

「しょうがないよね。緊張してるのよ、マユくん」

「す、すんません」

緊張してる。寒くもないのに身体が、とくに足が震えている。喉は乾く。胃が痛い。吐き気がする。熱が、頭痛が……………。論文発表や新人賞の授賞式でもこんなに緊張しなかったはず。こんなに緊張したのはいつ以来だ……………。

「大丈夫か。ガマガエルみたいな脂汗かいてるぞ」三村が言う。

「ガマガエルを見た事ないから、分らん」

「そんなに緊張するか？ 昔の女に会うだけで」

「昔の女に会ったことがないから、緊張してる。おまえだって浮気相手に会う時、緊張するだろ」

「そうだな、やっぱドキドキ……………するか！」

「え！ あなた、浮気してるの！」

「してねえよ！」

三村に夫婦漫才させて、オレは心を落ち着かせるために目を瞑った。

彼女に会って、なんて言えはいいのだろう。

どんな態度で接すればいいのだろう。

どんな顔をするのだろう。

オレは、本当に彼女に会ってもいいのだろうか……。

「あの……」

後ろからヒールの硬く小さな音と、懐かしい声が聞こえた。

目を開ける。振り返る。その瞬間、世界がゆれて、霞んでしまった。

「久しぶり……」

懐かしい声、懐かしい微笑み、今も愛しい人が、そこにいた。

「……江崎くん」

十五年前、たしかにオレは、彼女にそう呼ばれた。彼女に……。

萌絵の……声を聞いた。

溢れ返る、思い出が詰まった宝箱。

何かに後押しされるように、思い出した彼女の事。

バラバラになった写真を集めて揃えるように、話をした。

神様の悪戯なのか、それとも神様の怠惰だろうか。

三日後の夜に、彼女と再会した。

顔立ちは大人びて、綺麗になったね、なんて言ってしまうそうだった。だけど、どこか幼い頃の彼女の影はある。面影は、誰かの意思によって残されているようだった。そして、とても強く感じた彼女の微笑み。オレと付合っていた頃の、弱さは見えなかった。恥ずかしいくらい、オレが弱くなってしまったのだろうか。

それを教えてくれる観測者は、オレ達の間にはいない。

結婚したら女の人は強くなる、なんて年配の教授が言っていた。

だとしたら、男はいつ強くなれるのだろうか。弱くなるばかりなのだろうか。女の人は、いつ、弱くなってしまったのか。

彼女の目を見るのに戸惑った。先に視線を逸らしたのはオレだった。

きつと彼女は、オレとの関係で傷ついたとしても、今はもうその痕はないかもしれない。

ダメだな、男って。

一度刻まれた傷も愛も、いつまでたっても忘れる事ができない。

なんて、未練がましい生き物なのだろう。

格好わるいよな、萌絵。

「どうしたの、江崎くん」

気付いたら、三十才の萌絵がいた。その隣には、三十才のオレ。

「うっ……あ、え、あー、いやー……」

「さっきからポーっとしてるよ」顔を傾けて、微笑む萌絵。

オレは辺りを見渡した。ノイズのような多種類の声。

朦朧とした思考がクリアになって、現状を把握する。

ここは居酒屋の奥座敷。そうだ、みんなと待ち合わせした駅から、ここに来たんだ。その間の記憶が曖昧だが、現状はそうなのだからしかたがない。

すっかりしなければ。目の前のビールだって、全然減ってない。

「不思議だね……」萌絵が呟いた。

「え、なにが？」

「だってね……、前は、こうして並んで座ってるだけでも、すごく緊張したの……」

「え……、そうなの？」

「うん。手紙だってね、一枚書くのにレタセット全部使い切った事だってあるの。」

「そのまにか機の引き出しの中、レタセットで一杯だったの」

「そうだったんだ。知らなかったな。オレはてっきりスラスラかいてるものかと思つてたよ」

「あ、あとね、初めて遊園地に行ったときの、ハンバーガー」

「ん。……ああ、あれ、どうしたの、嫌いだった？」

「違うの。大口開けてハンバーガー食べるのが、すごく恥ずかしかったのよ……」

「尻を拭うような仕事で語る萌絵。」

オレは思わず我慢して笑い、吹き出してしまった。

「なんだか脱力。」

一人で緊張しているのが、バカみたいに思えた。

「なんだ、彼女もだったのか、なんて思ってしまった、また笑ってしまった。」

十五年経って、初めて知る彼女の気持ちがたくさんあった。

オレたちは、昔とは違う、バカみたいに喋った。

彼女には一歳と三歳の二人の子供がいるらしい。写真を見せてもらった。可愛かった。……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

「……ふと、自分の母親が、今の自分と同じ歳の時に、オレを生んだの思い出した。なんだか、不思議な気持ちに包まれて、嬉しくもあったり、情けないなと思つた。」

まるで十五年前のようだけど、もう、手を繋ぐ事はなかった。萌絵は実家の近くに新しい家族と一緒に住んでいるらしい。

それを聞いて、オレは、いつまであのアパートにいるのかな、と思った。騒がしい道から、だんだんと静かな通りへ。

見慣れた風景に、陽射しの強い時間の風景が脳裏で重なる。懐かしく、どうしてだろう、悲しくなってしまう。

並木通りから派生したように木々が囲む道。甘く力強い、キンモクセイの匂いが漂う。懐かしい匂い。橙色の小さな花が、道端に零れている。

「あ……………、ここ……………」

彼女は歩みを止めて、周囲を二回見渡した。

「そう。中学の時の通学路。……………ちょっと遠回りしてさ」

「なつかしい……………」視線を上げ、キンモクセイを眺めながら彼女は囁いた。

「あの頃、オレが先に帰ってばっかだったから、一度も、一緒に帰れなかったからさ」

夜風に乗って、あまい、あまい香りが揺れる。とても濃厚で、目眩がしてしまいそうなほど、あまい、香りと色。

「人妻相手に、キザー」

「そうだな。……………そうだよな、母親なんだよなあ」

「ふふ……………、変な感じ？」

「少しね」

歩き出す。あの頃通った道を一緒に歩いても、もう、オレたちは十五才でも恋人同士でもない。戻れない。

「オレも三十なんだよな。……………そろそろ誰か見つけて、結婚でもすっかかなー」

「そうすれば、いつか、この傷の熱も冷めるだろう。そうしたら、もう、苦しまなくていい。」

「……………やだ」

「え……………」

「それはきっと、オレが描いた、と思って読んでるからだよ」

「そうかもしれないけど……………でも、それだけじゃないと思う……………」

「読んでくれる人に何かしらの価値があるなら、嬉しいな。……………そういうえば、漫画に詩を書くことがあるんだ」

「あ、スカイ・クロウ。引用してるよね。なつかしいな」

「うん。すごく好きなんだ。その中でも『僕と君と月が泣く夜』の歌詞で、好きなフレーズがあるんだ」

「……………それ、私もたぶん、一緒かもしれない」

振り向いて、微笑む彼女に

『世界中が愛した女神より あなた』

祝福のように輝く海で微笑んだ、彼女が重なる。

『あなたを 誰より何より 愛してます』

手を握って、同じ音楽を片方のイヤホンで聞いて、君から生きてる喜びを聞いた。

『だから 僕に聴かせてくれ キミの生きた声』

なぜこんなにもキミの 幸せを願うの

抱き合った 夜 オレのベッドにいたはずなキミを

傷つけ合う事も 許し合って 一緒に 愛し続けた永遠を見たから ずっと

君の今からに 幸せを捧げたい』

十五年黙っていた言葉を、オレは言った。

「萌絵が、好きだ。本当に、好きだった。……………君が、元気でよかった」

「うん。……………江崎くんも、元気でよかった……………」

もう聴こえない音楽。

あの頃聴いた音はもうない。

だけど、やっと言えた言葉。

それだけが、思い出を繋ぎ止めてくれる。

忘れることが悲しい、姿と音を、今でも思い出させてくれる。

マンションの前で、オレたちは別れた。

「じゃあね。ここで……………」

「ああ、元気だな」

「うん。……………ありがとう」

「え……………」

「一緒に帰ってくれてありがとう」

萌絵は微笑んで、じゃあね、と手をふった。

まるで、また明日会えるような予感を残す十五年前と変わらない微笑みだった。

アパートに帰ると、幸田の部屋の前に人が立っていた。二人。一人は幸田で、もう一人は男。玄関のドアは開いて、男が今にも幸田の部屋に入ろうとしている……いや、出て来た所か……。って、オレ以外の男が幸田の部屋からだ！ なんの冗談だ。天変地異の演習でもしようとしているのか、あいつは。

男がこちらにやってくる。帰るのか。

走った。男とすれ違ったが、顔を見なかった。直ぐに、幸田に駆け寄った。

「幸田ッ」

「え、え？ 江崎さん？」

ドアが閉まる寸前、幸田の肩を掴んだ、

「おまえ、合コンで会って直ぐにお持ち帰りされる女はダメとか言ってたじゃないか！ なのに何してんだよッ」

「あ、あの、江崎さん、落ちて着いてください。ここ、私の家で、お持ち帰りされてませんよ……」

「あ……、でも、簡単に男を部屋に入れるのはどうなんだよ！」

「ち、違いますって、ただ方向が一緒だったので送ってもらっただけで、何もありませんよ。はい、断じて潔白です。……江崎さん、痛いですよ」

「あ……すまん」幸田の肩から手を放した。「なんだ、そうだったのか……オレ、格好わるいすぎ……」力が抜けてしまっただけで、その場に座り込んだ。

「ホント、格好わるいのは、変わんねえな……」

「でも、江崎ん。……それでも、私、江崎さんのことが、やっぱり好きです」

オレの肩に幸田の手がふれた。屈んで、オレをまっすぐ見る幸田の顔に、驚いた。「でも、昔の失恋の傷、ずっと引きずったままの江崎さんに、こんなこというの、

我が俣で、卑怯だっけ分っているんですけど……でも、好きです。だから、江崎さん……」

幸田の手が、オレの両手を包む。冷たい一瞬が、

「幸せになってください」

暖かい永遠になる予感がした。

「ああ恥ずかしいッ。もう、そんなにポカンとしないでください、恥ずかしいですから、もー。ごめんなさいね、私なんかで、かわいくなって」

幸田が立ち上がって、部屋の中へ行くとする。

それを、オレは腕を掴んで、立ち上がって、彼女を抱きしめた。

「ありがとう、幸田。……すごく、かわいいよ」

女ってすごい。

かわいい。恋をすると、かわいくなっていく女が、すごいと思った。

ダメだな、男って。格好わるいままじゃん。

☆☆☆

萌絵が自宅に帰ると、玄関まで三歳の息子が走って出迎えた。

その子供を抱きかかえて、萌絵はリビングに入る。

「おかえり。……同窓会で良い事あった？」

彼女の夫は、妻を見つめながらそう尋ねた。

「えっ、なんで？」

「なんか、いい顔してるよ」

「…………気のせいよ。……この子、寝かせてくるね」

うとうとと瞬きする子供を抱いて、彼女は寝室に向かった。そして、子供をベッドに寝かせて、寄り添う様に、見守るように彼女も横になった。

「ねえ、あゆむ。ママのないしょの話、聞いてくれる？」

「ないしょ？」

「今日、ママね。初恋の人に会ってきたの」

「……はっすごい、ってなあに？」

「あゆむも、いつかするよ。これからだーい好きになる、女の子のこと」

初めて、本当に好きになった人だから、

初めて、大切な気持ちを聴かせてくれた人だから、

だから、こっそり、願おう。

幸せになってください。

そして、子供だった自分に教えよう。

今の気持ちを、ずっと、忘れるなよ。